

〔別紙 2〕

2. アジア歴史資料センター公開資料と校史との不整合の疑問

(防諜研究所が 14 年 5. 11 に後方勤務要員養成所となったのか)

※以下、原文転載は現代漢字及び現代ひらがなを用いて記す。

- 資料名『後方勤務要員養成所 乙種長期第 1 期学生教育終了の件 陸軍大臣 板垣征四郎殿』
(昭和 14 年 7 月) 後方勤務要員養成所長 秋草俊
「後方勤務要員養成所 乙種長期第 1 期学生教育報告」(資料センターC01004653900)
(※以下、秋草報告と略す)

※採用学生は幹部候補生のみ。選考過程不明(1 期生から「口頭試問のみ受けた」と聞く一発表者)

『第 1、経過の一般 本教育は昭和 14 年(? 13 - 発表者注) 4 月 1 日防諜研究所新設に関する命令に基づき応急的施設として在九段下愛国婦人会本部附属建物 1 棟を借受けて諸準備を進めたるが同年 7 月 17 日第 1 期学生 19 名入所したるをもって取敢す同所において教育開始せり。

昭和 14 年 3 月 31 日に至り在中野電信隊跡兵舎内に仮移転を行い新庁舎並講堂の完成を待つて更に 5 月 1 日現在地に移転教育を続行す この間昭和 14 年 5 月 1 日軍令陸乙第 13 号並びに「大臣決済」に基づき防諜研究所を廃止し新たに後方勤務要員養成所を新設せられ教育内容の拡充強化を期せらるることとなりたるが建物の関係上教育施設等まだ完備に至らざる間において卒業式を挙行せり』

『第 2、教育実施並びに成果の概況』

一『(1)教育計画 教育計画は 4 月 1 日「防諜要員教育機関に関する申合せ」に基づき さらに参謀本部と協議の結果別表 1 のごとく予定表を作成せり』

一『(2)学期及課目の配合 全教育期間を別て前期(自昭和 13 年 7 月至昭和 14 年 1 月)後期(自昭和 14 年 2 月至昭和 14 年 7 月)の 2 期とし(後略)』

- 資料名『増給支給並に詰切居残服務食料支給部隊に指定相成度件上申 陸軍大臣 畑俊六殿』
(昭和 15 年 5 月 2 日) 後方勤務要員養成所長 上田昌雄 (資料センターC04122321400)
(※以下、上田文書と略す)

※同所長の 7. 29 付追加上申文書(夜食料)あり・8 月 13 日決済(中野学校後)

『当後方勤務要員養成所は来る 8 月陸軍中野学校に改編予定に付(中略-「軍事増給」と「食料特配」の軍規則名-発表者注)に陸軍中野学校を加ふる如く詮議相成たく及び上申』

『理由 1、当養成所は昭和 13 年 3 月防諜研究所として陸軍兵務局内に新設 同年 7 月より特殊勤務要員の教育を開始したるか 昭和 14 年 5 月 1 日軍令陸乙第 13 号並びに「大臣決済」に基づき後方勤務要員養成所に改編 引続き教育実施中なるが(中略) 2、当所(学校)の本質並に特殊教育の内容に鑑み特に防諜上格別の考慮を必要とするを以って職員の保秘上 従来^の給与上に差等なからしむること(養成所では適用-発表者注)絶対に必要とするものなり。』

疑問① 資料センター公開資料の「防諜研究所」の名称は「校史」には全く記述されていない。

「防諜研究所」は実在したのか？

◎防諜研究所が14年5.11に新たに後方勤務要員養成所となったのであれば1期生は防諜研究所 S13.7 入学となる(1期生証言と異なる－発表者注)

●新発見『資料センター』資料－『密大日記第4冊・派遣交代』末尾に記述・編次番号12『諜報機関新設に関する件』主務・軍事、年・13 密第1712(該当文書なし)⇒何を示すのか？

●(参考-次ページ『回想録』～日本に於ける秘密戦機構の創設～福元亀治著(以下、福本本))

◎校史編纂時期には、中野創立メンバーの一人・福本亀治氏はご健在であった(上田氏も59年名簿にて健在)。当然、当項の原稿作成には深く係っていたはずである。校史に「防諜研究所」という記述がないのが正しいのだろう。

●九段の仮施設には「陸軍省別室」の看板をかけていた(参考-次ページ・福本本)。

○「防諜研究所」の文書上の名称は、軍内外での秘密戦実行要員養成機関(後方勤務要員養成所・中野学校)の創設・存在を極秘機密保持するために用いた可能性が高い。逆に予算に苦しんだ？

○後方勤務要員養成所の報告書・上申書は大臣宛のみであり、兵務局・大臣官房のゴム印しか見当たらない。(他の部署には知られたくなかった?) ●(参考-資料センター)

疑問② 昭和15年5月2日上申書に後方勤務要員養成所長・上田昌雄とあるが「校史」には上田所長就任の記述はない(秋草氏のみ-14.12.19 発信文書最終あり)

●秋草所長・大佐は、15年1月4日の神戸英国領事館襲撃未遂事件(伊藤佐又氏)の責任を取って15.3 ドイツ・ベルリン星機関長に転出(参考-『校史 P118』年表「中野学校の歩み」、及び『中野校友会会誌 52号巻頭言「さらば秋草閣下よ」山本政義支部長(1期・中野校舍設計者)より)

●上田昌雄大佐はポーランド大使館付武官より帰朝し、陸軍省兵務局付となり中野学校設立準備を命じられている。(参考-『校史 P118』年表「中野学校の歩み」より)

(参考-同上年表『昭和15年8月・初代校長北島卓美少将、幹事上田昌雄大佐就任』

『昭和16年2月・上田大佐パレンバン攻撃の資料収集に外務省クリエルの資格で現地出張』)

○秋草氏と上田氏とは同年同月に転出入したが、秋草氏と事務引継ぎが出来たのか不明。確かに同一の所長印を使用している。(前出の山本文では秋草氏本人から転出の話は聞いていない。また上田氏就任の話も出てこない。つまり秋草氏離日後に上田氏編入と思われる)

疑問③ 養成所・学校設立認可と学生採用・教育開始時期のズレと経費予算の獲得困難

(参考-次ページ・福本本。〔別紙1〕)

○教育が充実してから「陸軍中野学校令」が出ている。令が出てから設置に掛かるのではないか

※「陸軍中野学校」は正規名称か？ 初代北島校長文書肩書きは東部33部隊。◎各部隊への増員計画依頼書に中野学校の名前を消して「東部33部隊」と訂正 ●(参考-資料センター)

○中野の用地発見(福本本)12年から施設完成14.冬まで約2年を要す。予算が無かったから？

●(参考-『福元亀治先生と中野学校 P12』(故福本先生追悼)昭和57年5月 中野校友会刊)

『中野学校創立の父 教職・斉藤林治郎』(前略)「校舎の増改築」建築に関しては近衛師団経理部が実施してくれており、(中略)電信隊の跡地であったので増改築を要する所が多く先生が教育部長として又後に幹事として計画を立案され校長の許可を得て、私が近衛師団に請求することになっています。)

- 参考文献 『回想録』～日本に於ける秘密戦機構の創設～ (P7—13) (以下、福本著書)
福元亀治著 昭和56年2月 中野校友会刊

(以下原文)

三 陸軍に於ける秘密戦対策

昭和十一年八月一日(発表者注—下記参考『校史』では同年12月1日)陸軍省官制の一部が改正され新設の兵務局に於て『防共に関する業務を行う』こととなった。そして憲兵界を追放された私は「陸軍兵器本廠付兼陸軍省兵務局付」を命ぜられ、陸軍省兵務局に於て勤務することとなった。

私は最初兵務課(軍務局より兵務局に移る)に於て防共業務の研究、次で防衛課の新設業務に服したが、たしか昭和十一年秋頃であつ他と思う、田中(新一)兵務課長から局長室に集合を命ぜられ田中兵務課長、岩畔豪雄兵務課員及び参本ロシア課の班長秋草俊中佐等と共に集合した。

阿南兵務局長より『現在の国際情勢に就て縷々説明の後、我国も国際情勢に即応して先づ「極秘裡に科学的防諜機関」を至急設立する必要があると思うので極秘裡に急いで機関の設立を研究せよ』との指示があつた。そして取り敢えず秋草中佐と私とが専任となって検討するように命ぜられた。私と秋草中佐との初めての出会いであつた。爾来、秋草中佐と私とは二者一体の関係で秘密戦機構の創設や秘密戦業務の策定、軍秘密戦勤務要員の養成、陸軍中野学校の創建等と半生を共にすることとなった。私共の縁結びは後に参謀本部のロシア課長や駐ソ日本大使館付武官、ハルビン特務機関長等を歴任した陸士同期の土居明夫君の斡旋によるものと思われる。

- (参考-『校史 P128』(前略)新たに「陸軍省兵務局において防共(後に防諜に改正)に関する業務を行なうこと」という条項が加えられ、同局兵務課で業務を担当することになった。(中略)この他軍事警察機関である憲兵隊を以つて、防共法規違反者に対する警察的取締りを強化させた。(中略)また別に、極秘裏に科学的防共機関を設置し(後略)…。(前略)着々として科学的諜報機関として整備されていった。これが警務連絡班である。)
- (参考-『研究ノート P92』「機密保持改善に関する件」(密受第1007号)昭和11年6月22日。『前同』(前略)昭和12年3月1日「防諜委員設置に関し処務規定改正の件」が通知され、ようやく参謀本部内に防諜体制の強化を図るための防諜委員会が設置された。)

四 科学的防諜機関の創設

秋草中佐と私とは連日検討の結果、

- (1) 新機関の設立は国内的、国際的に問題を惹起する危険性があること、
 - (2) 機関の建設問題は軍部の外、園内関係行政諸機関に影響を及ぼす心配があること、
 - (3) 設置上必要を現存諸器材や器具は何れも原始的を物ばかりで全部新調する必要があること、
 - (4) 別に秘密工作実施家屋等の建築が必要なこと、
 - (5) 秘密工作工事実施は園内関係行政諸機関との連絡工作等極めて困難を事項ばかりであること、
- が判明したので秋草中佐と二人が秋草中佐の同期で当時陸軍科学研究所の班長であつた篠田鏝中佐(理学博士)を訪問し一切の科学的関係諸器材の検討作製等を依頼し、その承諾を得た。

又秘密的諸施策や工事等に関し逋信省の担当課に直談したところ、担当課長は極めて剛腹な人で、自己一人の責任に於て秘密的諸工事一切の実施を承諾せられた。

又文書諜報等に関しては担当課長の責任に於て承諾され、関係往復文書に対する諸工作実施に関しては担当課長一人の責任で承諾を得たので、運搬車（秘密文書等の運搬）の運行等に関し特に警視庁交通部長の黙認を得た。

機関の職員は全部私が特高課長時代の特高課員中から極めて優秀な准尉以下約十名を機関工作員として転属された。

又秘密戦機材中写真機等は民間の写真機研究の權威者を秘に現住所神戸市に訪ねて写真機の改造等を依頼した。現在のような秘密早撮り写真機は其人が研究作製したものである。尚、科学的防諜施設に関し名古屋大学の某教授に多大の援助を得た。

機関の編成は秋草中佐を機関長とし、機関員は私一人であったが、後に参謀本部の英班から宇都宮直賢少佐が増員された。技術的關係班は憲兵隊より来た優秀な准尉によって編成した。此等の班長は特別の技能を有し後に要員教育学校の指導教官となった。

而してこの科学的防諜機関は第二次大戦の開戦機運が近づくに伴い機関の成果が重要視され後に其分派機関を神戸、福岡に設立され、後に上海、天津等にも分派機関が設置された。

秋草中佐と私とが機関を去った後、この機関は拡大強化されて有力な将官を機関長とした『牛込機関』となったが終戦と共に解散した。

- (参考-『研究ノート P97』(前略)1940年(昭和15年)8月警務連絡班は組織を拡充し、将官を長とする陸軍大臣直轄の軍事資料部に改変された。・出典元『増田嶺一(元憲兵大佐)手記』陸士36期・警務連絡班時代以来、陸軍防諜機関に勤務するとともに、中野学校の防諜教官も担当している。)
- (参考-『校史 P35』1期生の教育科目・教官一覧に「防諜技術 曾田(?増田の誤記-発表者注)嶺一(元憲兵大佐)の記述あり)

私はこの機関長であった将官から終戦後現在に至るも毎年賀状をいただいております。又、科学的防諜機関の設立其他器材の製作等に絶大を支援と指導をいただいた篠田中佐は後に神奈川県登戸に登戸研究所を創設し、中野学校建設後も引続き秘密戦器材の製作等に多大の援助を受けた。

五 秘密戦要員の養成

昭和十二年の初頃であったと思う。私と秋草中佐が兵務課長から呼ばれて『次の休日に秋草、岩畔、私の三名で阿南兵務局長の私邸を訪問せよ』と伝えて来た。三人は次の日曜日に相い連立って当時東京市郊外の三鷹（現在の三鷹市下連雀）に在った局長宅を訪問した。局長宅は武蔵野の面影を残している未開拓地の畑の中に在った。

局長より既に創設した科学的防諜機関の成果に就て謝意を述べられた後、『現在の国際情勢は益々緊迫を上げ、国際秘密戦対策は緊要となりつつあるので科学的防諜対策等の外、秘密戦実行要員の養成が必要となってきた。科学的防諜機関の運営は之を他に譲り、秋草、岩畔、福本の三名が実行委員となって至急に秘密戦実行要員養成機関の創設を検討せよ』との指示があった。そして三名が「要員養成教育機関設立委員」を命ぜられて建設準備に着手した。(1)教育地並に教育場の選定、(2)被教育要員の選考、(3)教育者(文、武教官)、(4)教育内容、教育資料、(5)要員の宿泊、給食その他、(6)教育資料の蒐集と教材作成等々幾多の困難を諸問題が想定された。

教育場選定のため私共三名は連日東京市外（現東京内）の空家探しを行ったが環境、秘密保持、交通状況、建物の面積等要件に適する候補家屋を発見することが出来なかった。

最後に当時国電中央線の最終駅であった中野の町はずれにあった「旧陸軍中野電信隊」の廃屋を発見し、地形上、場所的、環境的、秘密保持等に於て比較的適格場所と認めたが、電信隊移転後の敷地には電柱が林立し、電線が蜘蛛の巣の如く張り巡らされたままになっていること、又旧営庭内には背の高さ以上に繁茂した雑草が密生し、残存建物は腐朽して復旧が困難な状態にあること等々幾多の悪条件が残っており、その整地、清掃、電柱関係の解決、廃屋の修理復旧等々に莫大費用が必要であることが判明した。然し要員養成等には参謀本部はロシア課を除いて他は全部が反対であったため、其等の経費を公式に要求することは不可能であったので、養成所の中野設置決定は極めて困難を状態に立ち到った。

そこで私は秋草中佐と協議し、私の独断で解決したいと考え、秘に帝大派遣卒業学生を以て構成して居る懇親会の友人達と交渉し、経理局の主計課長や建築課長等と協議したところ、建築課の配当予算を流用して整理、清掃、電柱・電線の撤去、張替え、廃屋の改修及び本部充当家屋一棟の新築費用等全部を負担実施することの承諾を得たので「学校の創設準備」に取りかかった。斯くして種々の悪条件解決のため秘密戦要員養成学校の建設は著しく遅延した。

(1) 九段開校

然るに陸軍省においては「秘密戦勤務要員の養成を急いだため」学校の整備完了迄に取り敢えず要員候補者の養成教育を行うこととなり勅令を以て「後方勤務要員養成所」令が発布せられ、学校完成迄の間における「勤務要員の養成教育」開始が発令せられた。

- (参考-『校史 P34』「第二節 創設期」『昭和 13 年 2 月勅令で後方勤務要員養成所が創設され、(後略)』)

そこで私共はこの臨時要員養成所を東京市内で交通関係、環境関係、保秘関係等、種々の条件の下に探した結果、九段坂下の「愛国婦人会」が年一回全国大会開催の際、全国から上京する会員の会場及宿泊場に使用する比較的広い別館が空いていることを知り、愛国婦人会に交渉した結果、

(1) 約一年後の大会迄の期間、(※S13.4~S14.3 まで一発表者注)

(2) 陸軍省別室として職員の集合、執務、宿泊等に充当すること

等を条件として借用証を入れて借り受けることとなった。「陸軍省別室」の看板を掲げ別館の大広間と区別して職員室、教官室、教室、学生寝室、等に区分し、教育実施に就て次の如く協議決定した。

(2) 養成所の陣容

- (1) 所長秋草中佐（後大佐）、幹事福本中佐、訓育主任伊藤佐又少佐
- (2) 職員（事務職員等の採用）

(3) 教育課目

- (1) 諜報、謀略、宣伝、防諜その他秘密戦に必要な外国事情、軍事学、統計学、心理学、語学、通信、操縦、爆破等を含む幅広い範囲の諸学科及び術科

- (2) 精神教育を重視する
- (3) 教官は取敢えず参本部員、陸軍省課員、陸大教官、兵器本廠、陸軍科学研究所及び防諜関係機関等の専門将校並に技官の兼任とする他、通信学校、自動車学校、工兵学校等の各実施学校に夫々の教育を委託する
- (4) 武術は師範を部外の權威に求め植芝流（後の合気道、植芝範士）、劍道（大島範士）。

尚、第二期生から通信の岡本教官、統計学の岡安教官など専任教官も少しづつ入り第三期生の頃には通信、自動車等の術科関係に至る迄の専任教官の数も増え教育設備も畧々整備され、又、武術の植芝流もより実戦的を空手に変更、精神教育を一層重視し国体学の専任教官として吉原政巳氏を招いた。（※乙Ⅱより授業開始—発表者注）吉原氏は五・一五事件関係者であるが、国体学の權威である東大教授平泉博士に就いて濃く大学を学んだ人である。

3. 極秘裡の組織と秘密戦要員の養成について(●まとめ、参考—福本本及び校史)

○S11. 3. 23 福本特高課長⇒S11. 8 兵務局付⇒兵務課・防共業務研究⇒防衛課・新設業務

↓

○S11. 秋、阿南兵務局長指示(岩畔・秋草・福本各氏)『先づ「極秘裡に科学的防諜機関」を至急設立する必要があると思うので極秘裡に急いで機関の設立を研究せよ』

↓

○科学的諜報(防諜)機関設立⇒●『警務連絡班』(後に中野卒業生・防諜班—多数勤務)

⇒機関長・秋草中佐、機関員・福本少佐⇒施設(戸山町)機関工作員・特高課員、科学的関係諸器材・陸軍科学研究所、秘密的諸施設(傍受)・通信省

↓

※S15. 8●軍事資料部⇒施設(若松町)陸相直轄、運営・憲兵隊司官⇒軍事資料部本部長

↓

○S12. 春、阿南兵務局長指示『至急に秘密戦実行要員養成機関の創設を検討せよ』

↓

要員養成教育機関設立委員⇒建設準備に着手⇒中野の「旧陸軍中野電信隊」の廃屋を発見

↓

○要員養成等には参謀本部はロシア課以外全部反対(予算獲得不能)

↓

建築課の配当予算を流用⇒学校の創設準備開始⇒種々の悪条件あり建設は著しく遅延

↓

○陸軍省「秘密戦勤務要員養成を急いだ」⇒学校整備完了迄に取り敢えず要員候補者の養成

↓

○S13. 2 勅令・後方勤務要員養成所発布⇒九段「愛国婦人会」臨時養成所「陸軍省別室」看板

↓

○S14. 3 末「愛国婦人会」契約満了⇒中野へ仮移転(千駄ヶ谷より通学)⇒S14. 08・1期卒業

↓

2期学生乙種長期・乙種(乙I)、丙種(丙1)学生選考(陸軍各種学校・各師団、教導学校推薦)⇒審議⇒身元調査⇒採用決定(密令)⇒S14. 12 入校

↓

○S15. 8 勅令・陸軍中野学校令制定(東部33部隊)

↓

S15. 9 甲種1期学生(甲1)入学⇒S15. 11 卒業

S15. 10 2期学生乙種長期・乙種(乙I)、丙種(丙1)卒業

S15. 12 3期学生乙種長期・乙種(乙II)、丙種(丙2)学生入学⇒S16. 7 卒業

S16. 2 甲種2期学生(甲2)入学⇒S16. 5 卒業

↓

○S16. 10 軍令・陸軍中野学校令制定(官制学校)

S16. 9 4期学生(3丙⇒旧乙)、戊種(3戊⇒旧乙)学生入学

(以下、略)